

「子どもが主役になる商店街!創出」事業

アートが持っている人と人、人と街をつなげる力を活用して子どもや若い親世代が商店街に足を向けるきっかけづくりを

全国的な課題の一つが、古くからある商店街の衰退である。子どもや若い子育て世代が魅力を感じるスポットがあれば、彼らを商店街に呼び寄せることができ、活性化につながっていくのではないか。その試みのひとつとして、地元在住のアーティストが作ったユニークなおもちゃで遊べるイベントを開催したのが、BEPPU PROJECTである。

商店街が活力を失ってきたことの一因は子育て世代が求めるものがないから

商店街という言葉には、どこかハレがまじさがある。あるいは郷愁を誘うものがある。ところが日本に古くからある商店街の多くが、消費行動の変化などに伴い、「シャッター通り」という言葉に象徴されるように苦境に立たされている。日本有数の温泉地として知られる大分県別府市の中心市街地もまた、商店街をいかに活性化させるかという課題に直面している。もともと別府市の中心市街地は主に夜間の男性を集客ターゲットとしてきたという

事情が、そうした傾向にさらに拍車をかけているともいえる。

「自分たちが子どもの頃の別府市中心市街地は、楽しくて、夢があり、行きたくてたまらない場所でした。しかも商店街は消費空間であると同時に、車の通行がなく、店舗が連なることで人目も多く、本来、子どもにとっては安全、安心な場所。しかし現状では、単なる通路として利用され、特に自転車の往来が多い環境となっているため、子どもや高齢者にとっては必ずしも安全な場所とはなっていません。さらに20～30代の子育て世代に対するサービスが不足しているため、商店街に来るための動機が見つげにくいということがあります」

そう別府市中心市街地の現状を分析するのは、アートを媒介に魅力ある別府の町づくり事業を展開しているNPO法人BEPPU PROJECT代表理事の山出淳也さんである。そこで山出さんたちが取り組んだのが、未来を担う子どもたちが自由に創造力を発揮して楽しむ場づくりとしての「子どもが主役になる商店街!創出」事業である。さらにそこには商店街の活性化や高齢者、子育て世



イベント期間中、多数の親子連れが集まった「おもちゃの部屋」



イベントを告知するチラシ



保護者への育児相談と子どもをサポートするため保育士を常駐させた

代の若い主婦の孤立化防止、別府市などの大分県内に居住して制作活動を行っているアーティストの仕事の創出や発想の契機提供などの視点も盛り込まれている。

別府市中心市街地の商店街で開催した「おもちゃの部屋」

具体的な事業内容としては、まず、子どもたちが安心して楽しめるオリジナル知育玩具などの開発・製造を大分県内で活動するアーティストを中心に依頼し、口から球を入れると木琴のきれいな音が鳴るおもちゃや母子の重要なつながりであるおっぱいや稲のもみをモチーフにしたソフトスカルプチャー、三角形の竹のパーツを組み合わせて遊ぶおもちゃなどが制作された。

さらに、そうしたおもちゃなどで遊べるイベント「おもちゃの部屋」を商店街に立地するイベントスペースとデパートで、それぞれ昨年8月17日～23日、10月18日～31日に実施した。会期中、前者には225名、後者には358名の大人と子どもが別府市内や近隣市町村などから集

担当者より



地域や社会の体質をつながりて改善する。

NPO法人
BEPPU PROJECT
代表理事
山出淳也さん

助成をいただいたおかげで、1年間を通し、じっくりとこの事業の企画を考え、実践することができました。これを1回のイベントに終わらせるのではなく、恒常的な事業の入口にしていきたいと考えています。アートを媒介にして、子ども、親、高齢者などのさまざまな人が街とつながるためのきっかけづくりをこれからも続けていきたいと思ひます。

まった。それまで、わざわざ別府市中心街の商店街に出かける目的もなかった小さな子どもがいる若い親世代が、子どもたちが珍しいおもちゃで遊べるという理由で足を運んだ人が多かったというが、その期間だけでも、商店街に若い人たちを呼び込むきっかけになった。

BEPPU PROJECT企画事業課の那木萌美さんは、「ここでしか遊べない1点もののおもちゃがある、子ども同士や母親同士の出会いや交流の場にもなったという声を参加者から多くいただきました。商店街のお店の方々には、子どもたちがたくさん来てくれるとうれしいとっていただきました。おもちゃを制作したアーティストさんたちに現場に来てもらって、子どもたちと一緒に遊んでもらいましたが、今後の活動のためのいい刺激になったようです」と話す。また、玩具で遊ぶだけでなく、アーティストが参加して指導するお絵かき、工作教室、粘土遊びなども行われた。このイベントでは、集まった子どもたちが安心して遊んだり、保護者の育児相談相手となれるよう、保育士を常駐させたことも見逃せない。

子どもという地域の宝を通して、商店街の活性化について考えようというのが今回の取り組みだった。参加者からは、「こういう場所がいつもあればいい」と、恒常化を望む声が一番多かった。それを今後の活動の課題にしたい」と、山出さん。人と街、世代と世代をつなげる力がアートにはあると、改めて思った。